

第二章 目立たぬ少年

大平は晩年郷里へ帰ったとき、大野原と観音寺に通ずる別れ道の五軒屋というところにあるレストランで、従兄の齋藤学に、「わしは五歳の頃、このへんの家に養子にやられたことがあるんだ。あんまり悪さをするので一週間ほどして免職になつて歸されたがね」と言つたことがある。

さほど貧乏ではなくとも、子供のない家や少ない家が子供の多い家から「里子」にとるのは、当時の農家の相互互助の風習であつた。齋藤は「養子」か「里子」かを問い質さなかつたが、たとえ一週間にもせよ生家を離れた経験はよほど辛いものであつたのだらう。そのためか、大平はごく親しいものにほつりとこの事実を打ち明けただけであつた。

口べらしのもう一つの方法は、娘を早く嫁にやることである。正芳の姉テツは、十六歳で、隣の大野原村の山田栄太郎（のち大野原町助役）のもとに嫁にやられている。数年して、体をこわし、二人の幼児を残して死んだ。後添いとして、テツの妹のムマが栄太郎のもとへ嫁ぐ。姉が結婚したのとはほ同じ年齢であつた。

正芳は、テツが嫁入りしたときのことを記憶している。彼が六歳の冬である。

「姉の嫁ぐ日は冬の寒い日であつたが、箆笥や長持をかついで行く一連の行列が、私の村はずれの長い坂をいくつもの提灯を掲げてゆっくり上つて行くのであつた。私は、この行列に参加したくてたまらなかつたと見えて、その跡をどこまでも追っかけた。本家の従兄が、執拗に行列を追いかける私を抑えて引返してくれたが、私は尚も頑強に抵抗したことを覚えてゐる。」（『財政つれづれ草』）

ムマによると、正芳はこの時、「辛い」言つて泣き叫んで後を追つた」といふ。勝ち気で厳しい母に育てられた正芳は、この姉に深い思慕の念を寄せていたのである。

大正五年（一九一六年）四月、正芳は和田村立大正尋常高等小学校へ入学することとなつた。

「小学校に入学する日のごとであつた。私は茶色の立続のはいつた絹の着物を着せられた。正にこれは私の唯一の、一張羅の礼服であつた。ところが家を出て間もなく、近所のドブの中に転げこんで、この一張羅を泥まみれにしてしまった。その後、私はどういふ着物を着て学校に出かけたかは、不思議にも思い出せない。」（同前）

小学校同級生の大広久市（農業）や高橋芳雄（のち豊浜町議会議長）らの回想によると、正芳は身体は大きくがっちりしていたが、温厚で辛抱強く自立たない少年だつた。ただ相撲だけは好きで、遊び時間にはよく砂場でとつたものだが、正芳は独特の粘りがあつて、強かつた。

教師から問題を出されたとき、正芳は十分考えて確実だといふ自信がなければ決して手をあげなかつた。ある日の授業で、大変むずかしい問題が出された。誰も手をあげるものがなかつたので、しばらくして教師が「大平君」と指名すると、正芳は「ウーン」と言つたまま考えこみ、やがて的確な答をした。

また、考査の時に盗み見るものがあると、たいていの生徒は手や頭で答案用紙をかくしたものだ、正芳は見られてゐるのに気づいても平然としていたといふ。

二年の時に担任になつた茨木山治訓導は、師範学校を出て初めての教職づとめといふ若い教師で、柔道初段の立派な体格の持主だつたが、性格も明るく愉快で生徒から慕われた。正芳の組は男生徒ばかり四十七人なので、茨木は生徒たちに忠臣蔵の義士の渾名をつけ、正芳を大石内蔵助と呼んだ。ある時、生徒たちがたわむれに茨木を担いで砂場から職員室まで運んだことがあつたが、途中でみんながへばつても、正芳は真赤な顔をしながら最後まで担いで離さなかつた。茨木はのちに香川県議會議員となり、大平の選挙事務長をつとめた。

この頃の子供たちにとって、こうした学校生活はむしろ心の休まる時間だった。ほとんどの農家の子供たちは、学校がひけると、野良仕事はもちろんで、役牛の世話や副業に追われ通しの毎日がつづいていた。

大平は書いている。

「農民の生活は、春夏秋冬を通じてはげしい労働の連続であり、しかもその報いは乏しかった。凍土の中から萌え出る麦の芽とともに、正月が明ける。晩春、青い麦が色づく頃、苗代には稲の苗が新しい出番を待っている。田植え、草取りが済むと炎暑を迎える。秋の収穫を終えると、やがて灰色の冬がめぐってくる。農家のはげしい労働は、こうした壮大な自然のリズムとともに繰り返されるのである。」(『私の履歴書』)

農家の家計は、当時まだ現物経済的な色彩が強く、療養費や教育費、冠婚葬祭の費用などが必要になると、地主のもとに駆けこまなければならぬ家も少なくなかった。また肥料商は多くの場合地主が兼ねており、植付や種蒔用の肥料を農家に供給していた。そして出来秋になつてから、相当高歩の利子でこれを決済させたのである。したがって、多くの農家はつねに借金を背負ったかたちになっていた。

「私のうちもその例外ではなく、借金のことについて父母が、ひそひそ話をしているのを耳にしたこともしばしばであった。」(同前)

現金支出は可能な限り制限され、正芳は、小学校を終えるまでは、理髪屋に行つたことがなかった。

「頭髪が伸びてくると、父か母かが、カミノリで文字通り坊主のように青々と剃り落としてくれた。当時の散髪代は十銭であったが、父母はその金を節約する積りでいた訳である。」(『財政つれづれ草』)

こういつところから、現金収入をはかるいろいろな副業が試みられた。この頃最も盛んだつた副業は、麦稈真田を編むことであつた。

麦稈真田は麦藁帽子の材料である。裸麦の茎を、節のところを避けて、十五、六センチの長さに切断し、これを硫黄で漂白したものを三ミリほどの幅にさいて、いろいろの形に編む。一番簡単なもので、一反(二十六間)が二十四、五錢程

度のものであったが、一生懸命編んで十分一日かかった。子供たちはみな、学齡前からこの編み方を覚えさせられ、毎日のように帳場（ノルマ）を与えられた。これは彼らにとって悪夢のようなものであった。

「このちよ、う、ばをいただいて許りに、私は予習はおるか学校の先生から言付けられている宿題をも、十分果す暇もない程であった。日暮れまで魚釣りや球投げに興じて、このちよ、う、ばを完遂できなかった時には、母の前に出る事が恰も罪人が検事の前に出るように辛かったことを覚えている。」（同前）

正芳の姉テツが嫁ぎ先で早死したのは、腎臓病のためとされているが、「真田を編むことに熱中して或は割当てられ、又は計画した仕事の分量を、何とかして仕上げなければならぬという異常な義務意識をもっていたので、つい小便に立つ時間をも節約して編み続けたことが、その一因ではなかったかと思われる……。」（同前）

この頃の正芳の性格について、小学校の級友の高橋芳雄は、「兄の数光さんと弟の芳数さんがとてもきかん坊で取っ組み合いの兄弟喧嘩をよくしていましたが、その仲裁役はいつも正芳さんでした」と言っている。

また姉のムマには次のような記憶がある。

「あるとき、お父さんが大切にしていた松の木の枝が切り落とされていた。お父さんが怒って、枝をふりあげて、誰がこんなことをやったんだと言つと、正芳が走って行って手をついて、わしが知らんでやったんです。こらえてつかあさいとペコペコ頭を下げよった。お父さんもこの子には怒ることもできんと言いました。ほんとうは誰がやったことやら。」

苦しい農作業や副業、大勢の子供や奉公人をかかえた家計の苦しさ、そしてきびしい母親 家庭にはつねに、一種の緊張感がただよっていたことである。

正芳は、上級学年に進むにつれて、次第に勉強が好きになってきた。だが、参考書などは買ってもらえないので、教科書を何度も読んだ。麦稗真田を編みながらも、井戸から田へ水を汲みあげる水車を踏みながらも、教科書を読んでいる正芳の姿を見たものは多い。しかし、むろん遊びたい盛りの少年時代である。時には親の目をかすめて、近所の子供たちと

付近の野や山を駆け巡った。

「山では松茸や筍をさがし、海では海水浴や釣りを楽しみ、小川では小魚をとることに夢中になったものである。夜は演芸会をやったり、時には暗闇の中で幽霊に仮装し、仲間の度胸を試す試胆会に興じたこともあった。」(『私の履歴書』)。

弟芳数はこう回想する。

「兄貴(正芳)もフンドシー一つでよく泳いだ。泳ぎは上手だった。長谷から和田の学校へ行く途中に土野窪という所がある。そこにある泉にはよく行った。広いし、深さは三間ほどもある。水は湧水で澄んでいて、底まで見えて、冷たい。二人で行くと、もう仲間たちが来ている。石を投げてそれを競って底からとってくるという遊びだった。

魚取りも面白かった。川蝦、川蟹、鰻、泥鰌、鮒、鯉。親父が水利総代をしていた溜池から下って、予讃線の鉄橋のところまでがこつちの領分で、その向うは豊浜町の領分だった。けれども、家の仕事のノルマをさぼって遊んだあとは、腹がへつても帰れない。しかたがないので、とった蝦を河原の石で天日で焼いて、半焼けのを食べたこともあった。

そのほか当時はやった遊びは、パッチン(メンコ)や陣屋とり。陣屋とりは、紙切れを着物の肩に糊ではって肩章とし、斥候を出し、最後に突撃するという戦争ごっこだった。」

このような田園風景の中にも、社会変化の風は吹いてきていた。この地域に電灯がつきはじめるのが大正三年(一九一四年)、隣の和浜地区へ電話が入ったのが大正四年。正芳が小学校へ入学した大正五年四月には、高松から観音寺まで開通していた多度津線(現在の予讃線)の観音寺 川之江間が竣工し、この地域は、豊浜と箕浦の二つの駅を持つこととなった。

「汽車が初めて通った時の様子を、古老は次のように語っている。『汽車は二時間から三時間おきに一回ぐらいで、人々は、真黒い煙を吐いて走るお化けが通るから見に行こうと、弁当をもって、……高台に集まり、もの珍しさと驚異の目で見物したものである。』」(『豊浜町誌』)

このレールに乗って、いままで知らなかった知識や文明が流れこんできたが、その中には、正芳の幼い心に重い疑問となつてつきささる類のものもあつた。

その一つは、当時盛んにはじめていた都市の紡績業から伸びてきた職工募集の手であつた。これに誘われて、多くの若い男女が続々と大阪あたりに出稼ぎに行った。

「……ところが、その結果、気の毒な人も出て来た。病気（といっても主に呼吸器疾患であるが）にかかつて、青白い顔をして田舎に帰ってきて、静養する人が見受けられるようになって来た。親達は、これ又一生懸命に子供の病気を治してやろうとして、家計をきりつめ、栄養を摂取させたりしていたものである。中には、もっと悪い病気に感染したり、都会で墮落したりして、哀れな末路になった人も皆無ではなかつた。」（『財政つれづれ草』）

これは後の話になるが、正芳が大学に進学して二年のとき（昭和九年）、経済史の試験に「ランカシアと大阪」という問題が出された。当時は、大阪が綿業において英国のランカシアをおさえ、世界に覇をとなえた頃である。彼は、日本の女の勤勉さと低賃金、そして、これらの条件を支えた日本農村社会の不合理な構造が日本の紡績業を発展させたという趣旨の論文を書いて、『優』の評点をもらったが、それが少年時代に見聞きした原体験に裏付けられていたであろうことは察するに難くない。

交通の発達は、また商人の往来をも激しくした。商人は農村に入りこんで、さまざまな商売をするようになる。農民は物を買うことにも売ることにも慣れていなくなつたし、一方商人の舌は都会で鍛えられていた。したがって、農民が商人にしてやられることも少なくなかつた。

次は、少年正芳の目に映つた商人の姿の一つである。

「稲の刈入れや麦蒔がすんで木枯の吹く寒い頃、五、六尺にのびた砂糖キビを、掘って皮をむき、これを絞って炊いて固めて、黒い砂糖を作っていた。四斗樽に詰められた砂糖が、何本も庭先に並ぶ頃、商人が大きい天秤棒をかついでやって来る。四斗樽に詰められた砂糖を風袋込みで計るのである。天秤棒の端にかかつた分銅が、十分上りきらない直前に、商

人は分銅をつるした縄の根っこを巧みにひねって、何貫何百匁と宣告するのであった。

子供心に、私は、もう少しその分銅が上りつめて、上下の運動が静止したところを見て、公正にその重量を計ってもらいたいものだと考えたことが度々あった。スルイ奴だと思ったが、百姓衆はこれに何の抗議もしなかった。この砂糖の商売で、数力年の間に、巨万の富を蓄えた人が、私の村にも出来たのである。」(同前)

さらに、この静かな農村を騒がせた事件も生じた。

「私が子供の頃、近所に小学校を停年退職されたおじさんがいた。

……ところがその人が、何時の間にか、自転車に黒い鞆をつんで毎日方々に出かけるようになった。不思議に思っていたら何でも報国貯蓄とかいう金融機関の駐在員になって、付近の農家や商家に貯蓄の勧誘に出かけていることが判った。

……第一回の元利償還期には、約束された通り元利の支払が行われたので、ぐんと信用も増し、加入者が激増した。

……ところが第二回の元利償還期がきたが、到々その支払は実行されなかった。大勢の加入者に責められて、老先生は暫くして悶々の中に死んでしまった。どこに訴え、どこに助けを求めるか、何の手筋もなく、大勢の加入者は泣寝入りするより他に道はなかった。」(「素顔の代議士」)

目立たぬ少年正芳は、あの細い目で、世の中の移り変りを観察し、幼い、感じやすい心にそれを刻みつけていた。

世界では、第一次大戦が終わり、新しい時代が始まろうとしていた。日本はこの戦争に参戦はしたものの、主戦場であるヨーロッパの戦闘には巻き込まれず、欧米先進諸国が戦争に忙殺されている間に経済を大きく発展させた。これまで赤字に苦しんでいた対外収支は一変して大幅黒字となり、工業生産も飛躍的に拡大した。たとえば、各産業分野の企業新設、拡張資金を、開戦時の大正三年(一九一四年)と大戦が終わった翌年の大正八年について比較してみると、化学と鉱業で十七倍、金属で三十四倍、造船で百十二倍、紡績では実に百五十三倍に達した。

政治的にも、また思想や文化の面でも、第一次大戦は大きな画期となった。大正七年の米騒動は、最初の本格的政党内

閣である原敬政友会内閣を生みだす契機となり、普選運動は新しい高まりを見せた。労働組合や農民組合の組織化も進み、社会主義政党も相次いで結成された。少数の知識人によって密かに日本共産党がつくられたのもこの頃であった。

原敬内閣は、その主要政綱に教育制度の発展をかけた、高等専門教育が大幅に拡大された。大正七年から大正十五年の間に、大学は五校から三十七校に、高等学校、専門学校は百四校から百七十校に増えた。飛躍的に層を厚くした知識人や学生の間には、欧米の思想界のさまざまな潮流がつつぎと紹介され、アメリカ的デモクラシーとロシア的コミニズムがとりわけ大きな影響を及ぼした。

「もちろん農民の生活の底辺には、重い生活苦と暗い争いが絶えなかったが、どちらかというとりペラルで平穏な時代であったといえよう。」と大平自身は述懐している。(『私の履歴書』)

正芳は大正十一年(一九二二年)三月に、和田村立大正尋常高等小学校の尋常科六年を卒業して、そのまま高等科の一年に進んだ。一歳年上の兄の数光は、すでに前年と同じく高等科に進んでいた。数光はそこを卒業して、家業を受け継ぐという方針だった。正芳は、尋常科卒業と同時に中学へ進学したかったが、家計と周囲の事情はそう簡単にそれを許さなかった。

当時、一般の農家の子弟は、小学校あるいは小学校高等科卒業だけで家業を継ぐが実社会に出るのが普通で、よくても、小学校卒業後、実業学校、農業学校等の上級学校へ進んで職業課程だけで終わるのがせいぜいであった。小学校の四十数人のクラスの中で、中学進学者は多くても二、三人、それもボンサンと呼ばれた富裕な地主の子が主であった。

そういう状況の中で正芳が中学進学を志したことについて家族の証言を総合すると、父利吉の「二、三男には分けてやるものもないから、学問ぐらいさせてやろう」という判断と、それにふさわしい正芳の成績、そして、おそらくはこれが最も重要な要素であろうが、弟のすぐれた資質を見ぬいていた兄数光の意志があったものと考えられる。正芳は、数光が高等科を卒業して家の仕事に専念できるようにすると同時に、中学進学の希望をかなえられることとなった。弟芳数は、

のちに県立観音寺商業学校に進む。

「ついつつわけで、正芳が高等科に入ったときには、一年後の中学進学を決心はとづくにかたまっていた。目指すは、観音寺町にある香川県立三豊中学校（現観音寺第一高等学校）である。入試にはどうあってもパスしなければならぬ。そこで、彼は受験勉強の師を求めることにした。

ちょうどこの年から和田村立大正尋常高等小学校の校長をつとめた内藤芳太郎の夫人久（故人）は、豊浜町立豊浜尋常高等小学校の訓導であった。彼女は次のように記している。

「学校が新学年をむかえたばかりの四月三日、さっぱりした紺がすりの着物を着た少年が一人で私を訪ねてきた。そしていきなり『勉強教えてください』とそれだけ言った。私はいろいろたずねてみて、この少年が大平利吉さんの次男坊だということ、高等小学校の一年生で、来春は三豊中学（旧制）に進学の希望を持っていることを知った。

大平さんの家は私の家から一キロあまり離れた長谷部落にあつて、以前からお互いに知り合つてはいたが、こんなにほつべたの赤いおっとりした少年があることは少しも知らなかつた。ちょうど二、三日前から勉強にきていた近所の田中淑造（現鹿島建設東京土木本部技師長）少年がいたので、私は大平少年の学習もみてあげることにした。

その翌日から二少年は私の家の夕食が終るころ前後して勉強に來た。そしてそれが一年三百六十五日一日の休みもなくつづいた。今考えてみると、よくもあきなかつたものだと思つ。雪のふる夜、大平さんは赤げつとをかぶつてやつてきた。ある秋の台風のはげしい夜、主人が『さすがの正芳君も今夜は休んだらしい』と言つたとたん、入口の戸があいた。私たちがおどろいてみると、『川は水一ぱいだったので樋谷をまわつてきました』とおそくなつたことをわびた。

……数学の学習の時、難問に出合つと、たいていは淑造君が先に解答し、『お前ただか、俺できた』と伸び上がった。まだ鉛筆を持ったままの大平少年のノートをのぞき見る。千石地主で男女五、六人の使用人がいる家の淑造少年と、わずかの耕地を小作している家の大平さんとの中において、私は淑造君をたしなめたこともあつた。このようなことはしばしばあつたが、大平さんは平靜に難問ととりくみ、ひがみ、うらみなどのきたないものは点ほどにも持つていなかった。二

人共にお手上げの問題になると、淑造君は机にしがみついて、しくしく泣きだすが、大平さんはむっつりとして、こつこつ解答して行った……。」(『四国新聞』昭和四十六年十一月一日付「月曜随想」)

もつとも、田中淑造の記憶によれば、泣いたのは正芳の方で、「当時としては難しい問題が出されたんでしょうなあ。できない問題があるわけですよお互いに。ところが彼はできないと、よほどくやしかったのか、ポロポロと涙を流してしました。それはいい意味で、非常に負けん気が強い一つの現われではなかったかと思えます……。」(『燧』第四号) おそらくそのどちらも真実だったにちがいない。

入試は無事にパスして、正芳は三豊中学に進むことになった。

大平正芳に関する三豊中学の学籍簿には、正芳の小学校時代の最終成績が記入されている。「修身10、読方10、書方10、綴方10、算術10、歴史10、地理10、理科8、体操10」。そしてよくなかったと言われている唱歌は「9」、席次は四十八人中二番であった。

家庭事情としては、同居が兄一、弟一、妹一、其他下男一人、下女一人とある。

また、注目すべきは、将来の希望を記入する「志期」という欄に、「父兄」による記載はなく、「本人」の意志として「官吏」と記されていることである。中学入学時点で正芳がどのような「官吏」像を描いていたのか、それは判らない。身のまわりに見る教員、警察官、鉄道員、地方の役所の吏員などを思い描いたものか、それとも、中央官庁のエリート官僚像を頭に浮かべていたものか、いずれにしても、まだ、官が「お上」であった時代に、若い正芳は自らの将来の希望をそのように記し、やがて、この時心に期した道を進むようになって行くのである。

大正十二年(一九二三年)四月六日が正芳たちの三豊中学校入学式の日であった。同じ和田村に住んでいて、同時に入学した片木雅文(農業)は、その日の朝のことをこう語っている。

「入学式には父兄が同伴して行くことになっていました。大平さんのところはお父さんが、私の方は、父が先生をしてい

たので、お祖父さんがついてきてくれました。大平さんのお父さんは着物のすそを帯にはさんで、いわゆる尻からげの姿で歩いてきました。私たちとは駅で一緒になったのですが、大平さんのお父さんが出札の窓口で切符を買っていると、大平さんはお父さんの後へ行つて、素早く尻からげのすそをおろしたのです。

それをうちのお祖父さんが横で見ている、利吉さんとこの息子は、切符買いによるお父はんの尻をおろしよつた。いかにもよく気がつく子じゃ」と言いました。

私は、「小学校を出たばかりの子が、尻からげを見苦しいと気がつくなんて、お前もぼんやりせんと、見習わにゃいかん」と後でさんざん言われたものです。

この日の正芳は、着物に袴、そしてゴム靴といういでたちだった。

「学校の校庭には、靴屋、カバン屋、洋服屋、文房具屋等が、夫々屋台を臨時に設けて、新入生の購買慾をそそっていた。私は人並に、何より革靴が欲しかった。正札を見ると六円と書いてある。その屋台の附近を去りやらず徘徊しつつ、到々父に革靴を買ってくれとせがんだ。父は。ゴム靴で間に合つてはないか、といつてどうしても買ってもらえなかつた。屋台に陳列された革靴が、手の届かない片思いの恋人のように、恋しくもあり且つにくくもあつたのである。当時はいていたゴム靴の命脈がつかたその年の夏、私は漸く待望の革靴を手に入れることができた。」(『財政つれづれ草』)

三豊中学は、明治三十三年(一九〇〇年)三月に香川県立丸亀中学校の分校として誕生、三年後の明治三十六年に独立し、香川県立三豊中学校として開校したものである。戦後の学制改革で香川県立観音寺第一高等学校となり、中央、地方で活躍する多数の人材を輩出している。

「中学では、中井虎男先生の数学と、細川敏太郎先生の漢文が忘れられない魅力ある講義であつた。中井先生はお若い頃から肺を病んでいたが、毎朝の冷水浴で自らの活力を支えておられた。私も先生にならつて、五十歳になるまで毎朝冷水浴を欠かすことはなかつた。おかげで風邪をひかずにすまふことができたように思う。細川先生は神宮皇学館出身の漢学。

者で、そのリズムミカルな講読は、若い私の心を強くひきつけて放さなかった。」(『私の履歴書』)

とりわけ、中井教諭は、当時の三豊中学のシンボルのような教師であった。三豊郡大野原村に生を享け、明治三十七年、開校間もない三豊中学の教諭に任ぜられて以来、昭和九年まで三十余年、ほぼ半生を同校のために献けて、昭和四十四年に九十一歳で亡くなった。

中井教諭の一周忌にあたり編纂された『志のぶ草』に寄せた文章の中で、大平は次のように追慕の念を記している。

「……先生は数学者でありましたが、またそれ以上に教育者でありました。先生は子弟と郷党に父のように犯し難い威厳と、母のような限りないつくしみを以て接せられました。先生は自分の倅せより人の倅せを、こい願われました。人の悦びをそのまま自分の悦びとしてかみしめられました。更に先生は勲章や蓄財を他処に、その永い生涯を専ら清貧の境に終始されました。有限の成功を求められることなく、只管無形にして無限の成功を子弟と郷党の中に追求されました。真の偉人とはかくの如き方であるといつことができます……。」

この観音寺の三豊中学校で、温かい教師、よき友人に囲まれながら、正芳は中学五年間の月日を過すことになる。

その頃、観音寺は人口わずか一万五千弱にすぎなかったが、なんと行っても和田村のような農村とは違って町であった。家と農村を離れ、新しい友人たちと交わるという刺激が、正芳の心を躍らせないはずはなかった。

「……毎日豊浜駅から汽車で通学した。最初は旧式の客車で、ボギー車を通るようになったのは高学年に進級してからであった。いつであったか、東京の大相撲が巡業に来て、汽車に乗る時、各座席の横についておるドアの入口が狭いので、体を横にして乗車している姿を見たこともあった。男子の学生は列車の前半、女子の学生はその後半に乗るのが不文の慣例であった。」

観音寺駅前の一貫堂は、当時からパン屋としてその盛況を誇っておったが、われわれは買喰い禁止の校規を破って、しよつちゅう、裏の台所で、ふかし立ての甘い匂いにするパンを食べさせてもらったものだ。やさしかった奥さんの温容が今でもありありと思い出される。

……春まだ浅い卒業や入学の時の人々のせわしい気配、新しく手に入れた教科書のもつ新鮮な感触、有明の浜の水泳や野外演習を彩った友の姿や顔また顔、くずし(かまぼこ)やちくわに濃いぬかの香をもつ新香を添えた弁当の魅力、校庭の隅で時折展開された上級生のリンチをめぐる緊張、丸亀中学や西条中学との対抗試合における興奮、等々、母校を舞台とする思い出はつきない……。」「(観音寺第一高等学校八十周年に大平が寄せた文章より)

正芳たちの入学は、三豊中学が定員一学年百人制(一クラス五十人で二クラス)をとっていた最後の年にあたった(大正十三年より定員百五十人制となる)。大正末期にはまだ、県下に五つの公立中学校しかなかったため、ここへ入ってくるもの多くは、良家の子弟で、しかも相当に優秀な頭脳の持主であった。

「中学における私のクラスは、……珍しく秀才が多く集まっていた。もっとも私は、中の上位の成績で一向にさえなかったが、卒業生八十人のうち、たしか旧制高校に十二、三人、旧制の高専に十四、五人が入学するという記録を残した。」
 『私の履歴書』

当時の友人たちの多くは、小学校時代の友人と同じく、正芳を「目立たぬ少年だった」と言っている。級友たちのこもこも語るところを聞いてみよう。

二年先輩の田中隆造(前出田中淑造の兄、のち阪神電鉄社長)にとつての正芳は、「中学へ通学するために通った豊浜駅への野道では、数人連れ立った上級生を先頭に一列になって歩んだ仲間の二人でした。……口数の少ない、温和しい感傷的な人柄で、目立たない存在でありました。……総理と同村の友人という間柄から何かエピソードをと、マスコミの方から求められて、その回答に当惑せざるをえなかったのも、少年の日の痛烈な思い出が私にはなかったからです。」

また田中淑造は言う。「彼は子供のころは無口でしたよ。ふだんからキチツとしていたね。……当時、白いスツクカパンだ。われわれ生意気なヤツは、片一方の左肩だけにかけていい気になって通学していたが、この点、彼は絶対にそんなこととはなかった。とにかく中学時代の彼は少しも目立たないごく普通の少年だったと記憶している。」

松岡健雄（前県医師会会長）の場合、「逸話がないのがあの人の特徴じゃないでしょうか。われわれの学校では弁論大会などやりましたけれど、そういうものにも出たことはなかった。」

大西逸平（医師）、「大平さんは勉強も派手でなく、じっくり考える方で、あまり目立ちませんでした。」

本田益夫（のち観音寺第一高等学校校長）、「あるとき、剣道の先生が、廊下を声高に話しながら歩いている生徒を見て自分の悪口を言ったと思ったらしく、竹刀でなぐりつけたことがきっかけで、ストライキが始まりました。いくら当時でも、暴力はひどいということになり、寄宿舎にこもってしまつて、授業に出ないことにしたのです。結局は中井虎男先生の骨折りで解決した小事件ですが、その時も大平さんは慎重論を唱えていましたね。」

以上は主として、大平が『目立たない少年』であつたとする回想である。

級友たちにこのような印象を与えたのは、大平の控え目な性格と慎重な態度によるものであろうが、また当時の彼の生活環境にもよつていたと思われる。正芳は、中学に通うようになって、家の仕事を手伝わなければならず、他の多くの生徒たちのように、放課後ゆっくりと学友たちと過す余裕はなかった。

姉ムマによれば、「稲刈りのときなど、正芳は毎朝三時に起こされ、男衆と一緒に一反ぐらい刈つてくる。それから朝食をかきこみ、弁当も自分でつめて、裏道を駆まで走る。それはとても早くて、いつ行ったのかわからないくらいじゃった。夜は夜で、ガス灯の光で稲刈りをしりました。ひとつも大層らしくはせなんだけれど、もうちょっと勉強させてくれと思つたかもしらんなあ。麦稗真田にしても、お父さんが勉強が大事だから、もうこらえてやれと言つのに、お母さんは、正芳が落第しても、編まさないやらんと言つておりました。」

多くの友人が正芳の若い頃について、もっぱら『目立たぬ少年』という印象を抱いていたのに対し、当時親しかった二人の人は、少し違つた感懐を持つている。

柳生香（現柳生商店社長）は次のように回想する。

「大平とは三中一年のときから、組も柔道部も一緒に、懇意にしていた。休み時間などはよく二人でいた。私の家が彼の

毎日の通学路の途中にあったことなどからよく付き合っていたし、懐かしく思い出される。……二人とも家事労働の手伝いは一生懸命にやった。このため学校では居眠りもした。彼は居眠りをしているのか、何か考えているのか、先生の顔を細い目で見ながら授業をうけていたが、俗にいうガリ勉ではなかった。しかし英、数、国は得意の科目で、とくに英語は一人で何やらペラペラしゃべっていた。

……子供のころの彼は純情無垢の少年で、はにかみ屋、恥ずかしがり屋であった半面、ときにはびっくりするほどの反発力をもっていた。何かイヤなことをいうと、ブンと反発しておったね。

ときたま意気けんこうに歌や好きな英語の一節を力強く口吟したりして、野性的といつかなんというが、独自の信念をもった芯の強いところがあった。柔道はそう強くなかったが、精神力は少年のころから不屈なものをもち合わせていた。」

中学も半ばをすぎ、四年を迎えると、もう卒業後のことを考えなければならなかったが、正芳は、四年に進級して間もなくの夏、ひどい腸チフスにかかり、四カ月間も生死の境をさまよった。父と母の必死の看病の甲斐あってようやく一命はとりとめたものの、学業はおくれて、成績はクラスの半分以下に落ちこんでしまった。

家の経済を考えるならば、学資の要らない上級学校を選択する以外にはない。正芳は、幼い頃、にいちゃん、にいちゃんと呼んで慕っていた自家の従兄、大平秀雄（のち陸軍少将）が陸士出身の軍人だったこともあって、自分は海軍を目指すこととした。病気が回復するや、ただちに受験勉強を開始して、翌年春、海軍兵学校の受験を試みるが、試験の前に急性中耳炎に襲われて、身体検査ではねられるという不運に遇った。

この挫折は、上級学校への一つの道が断たれたことを意味した。正芳の焦燥感は深くなったことである。

不運はさらに重なった。正芳が中学五年に進んだ昭和二年の八月二十九日、父利吉は、正芳の病気による心労と介抱づかれの原因とするかのように、胃潰瘍で亡くなったのである。享年五十六。

「それはわれわれ家族にとって、突然訪れた不幸であり、致命的なことでもあった。母は病身であり、若い兄が家業を継

いだが、途方に暮れていたにちがいない。しかし、母も兄も不幸にめげることはなかったし、また私たち弟妹に細やかで温かい配慮をしてくれたことはありがたかった。」(『私の履歴書』)

この頃のことである。前出の友人柳生は、校庭で、正芳から「お前、陸士(陸軍士官学校)を受けたらどうか」とすすめられる。柳生は突然のことにめんくらったが、正芳がまじめに考えることがわかったので、ほどなく「陸士行き」を決意した。すると、正芳は柳生に参考書を山ほど届けてくれた。柳生は正芳が海兵受験に使ったその参考書を見て、びっくりした。「いつやったのか、彼のすさまじいばかりの勉強の跡が実にきれいな字で克明に記入されていた」。正芳の参考書で柳生は奮起し、その甲斐あって陸士入試に無事パスしたという。

中学五年という正芳にとってつらい時期のことについては、同期生の近藤厚実(のち千葉大学教授)にもこう思う出がある。

「たしか中学五年のとき授業の合間の休み時間、二人で校庭を歩いていた。その時、大平さんが空を仰いで、『We must be vivacious!』と言ったんですね。私にはその意味がよくわからなかったので、家へかえって辞書をひくと、『快活な』、『活発な』という意味だった。私はこのとき愕然としました。私が内心一番気にしている欠点を彼に指摘されたこと、もう一つは私の知らない単語を彼が知っていたことです。『おそらく正芳は、このとき、友に対してではなく、自分にむかって、Be vivacious! と叫んでいたのだ』」

同じその年の夏、前年、四年修了で岡山の第六高等学校へ進学していた同期の森奮夫(のち共同石油社長)は、夏休みに家にかえってくる時、中学校に来て進学の話をしると言われた。その話の終わったあと、森は正芳から八ガキを受けとった。

「大平さんとはそれまではあまり親しい付き合いではなかったのですが、おそらく大平さんは私の話で強い印象を受けられたのでしょう。文面はこの上級学校へ行ったらしいか迷っていること、いろいろと苦しみの多いことが書いてありました。今でも覚えているのは、大平さんの八ガキの文字が実にきれいで、文章の句読点がキチンと打ってあったことです。」

さらに森は、正芳が 目立たない少年 だったという多くの人々の印象について、「ただ単に目立たないのではなく、本来の性格として、自分にブレイキをかけるようなところがあったのではないでしょうか」と述べている。言い換えるならば、目立たないように努めていたということである。これは、大平が後年になって発揮した強い自己抑制力が、すでにこの頃に培われつつあったことを示唆するものである。

不幸の多かった中学の高学年時代も終わりに近づき、正芳は自らの方向を決めねばならなかった。

父を失ったばかりの大平家にとつて、正芳を上級学校に進学させるのは、きわめて大きな経済的負担である。軍関係の学校に入学する道は中耳炎の後遺症によって閉ざされており、学資の要らない進路としては師範学校の二部だけが残されていた。

「ところが、たまたま私の叔母が、警察官に嫁いで高松市の近郊に住んでいた。『自分のところから通学させてよいか、高商を受けさせては……』と勧めてくれた。結局、そうすることにになり、卒業とともに旧制高松高商に入学した。」「私の履歴書」この時の受験生は九百三十二名であり、合格者は百六十一名であった。

三豊中学第一年に入学したときの正芳の席次は、百人中四十一番だったが、卒業のさいは七十三人中十九番である。因みに、卒業時に最も成績のよかった学科は、英語90点、漢文88点、英作文87点等であり、最もよくないのが、化学65点、英訳68点、代数69点等である。